

大分類			
中分類			
小分類			
キーワード	国際ホテル、堀抜義太郎、松下電工、芦屋学園、海南荘		
項目名	国際ホテル		

概要：国際ホテルの建設から建物の終焉まで

目次：

1. 写真
2. 建物概要
3. 施工会社
4. ホテルについて
5. 建築主の変遷
6. 阪神淡路大震災

内容：

1. 写真 (芦屋市ホームページより：思い出写真館【現存する芦屋のモダニズム建築】)

旧国際ホテル（昭和12年）



国際ホテルは昭和12年六麓荘の中腹に建てられましたが、戦時中はGHQに接収されたのち芦屋女子校を経て現在は芦屋大学となっています。

芦屋市が1990/11/10に刊行した「芦屋今むかし」には、「六麓荘国際ホテル」というタイトルで国際ホテルは、茅渟(ちぬ)の海を見下ろし、四季を通じて観光明媚、しかも芦屋駅から十数分の便利な立地ということで、昭和12年9月六麓荘に建設されました。戦時中は、企業の研究室として使用されたりしましたが、戦後は米軍に接収され、外国人や一流財界人が泊まるホテルとして有名でした。

とあるが、外国人などが泊ったということが時期も内容も意味不明。

2. 建物概要（旧登記簿より一部を転記）

2-1. 六麓荘町八八番地（家屋番号：打出式参〇参）

・鉄筋コンクリート造陸屋根六階建て地下階付

一階：式七参㎡〇五、二階：式四七㎡九参 ~ 六階：式四㎡七九、地下：九九㎡壹七

2-2. 六麓荘町八九番地（家屋番号：打出式参〇四番四）

・鉄筋コンクリート造一部木造スーパーアルソイド葺二階建

一階：式壹壹㎡七参、二階：壹壹八㎡九四

2-3. 登記番号：第四七貳貳號（損耗閉鎖登記簿）

表題部 壹番 昭和拾四年九月貳拾九日受附 武庫郡精道村打出字劔谷四九番ノ壹地上

… 右登記ス [川口記：図面有りとあるが保管されていないのが残念]

甲 壹番 昭和拾四年九月貳拾九日受附 左ノ者ノ為メ所有權ヲ登記ス

川邊郡伊丹町伊丹貳参六番地 堀抜義太郎 [川口記：個人で建てたもの]

貳番 昭和拾九年参月七日受附 賣買證書に依り左ノ者ノ為メ所有權ノ取得ヲ登記ス

大阪府北河内郡門眞千六番地 松下電器産業株式会社

参番 昭和貳貳年壹月貳参日受附 特別經理會社ノ旧勘定ニ所属スル財産ナルヲ登記ス

四番 昭和貳四年拾貳月貳参日受附

昭和貳四年拾貳月拾五日新勘定及び旧勘定併合ニ[・判読不可・]旧勘定登記

五番 所有權移轉 昭和参拾参年参月貳五日受付第壹八五七号

原因 昭和同年同月拾五日賣買

取得者 芦屋市六麓荘町六拾番地 学校法人芦屋学園

右登記する

3. 施工会社

3-1. 会社名 竹中工務店 神・支

3-2. 竣工年度 昭和12年

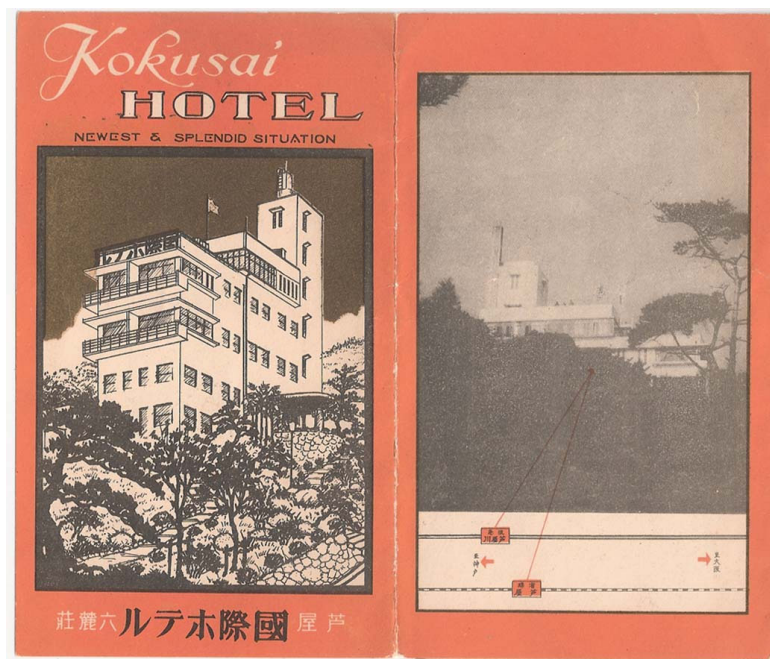
3-3. 設計者 宮地米三

4. ホテルについて

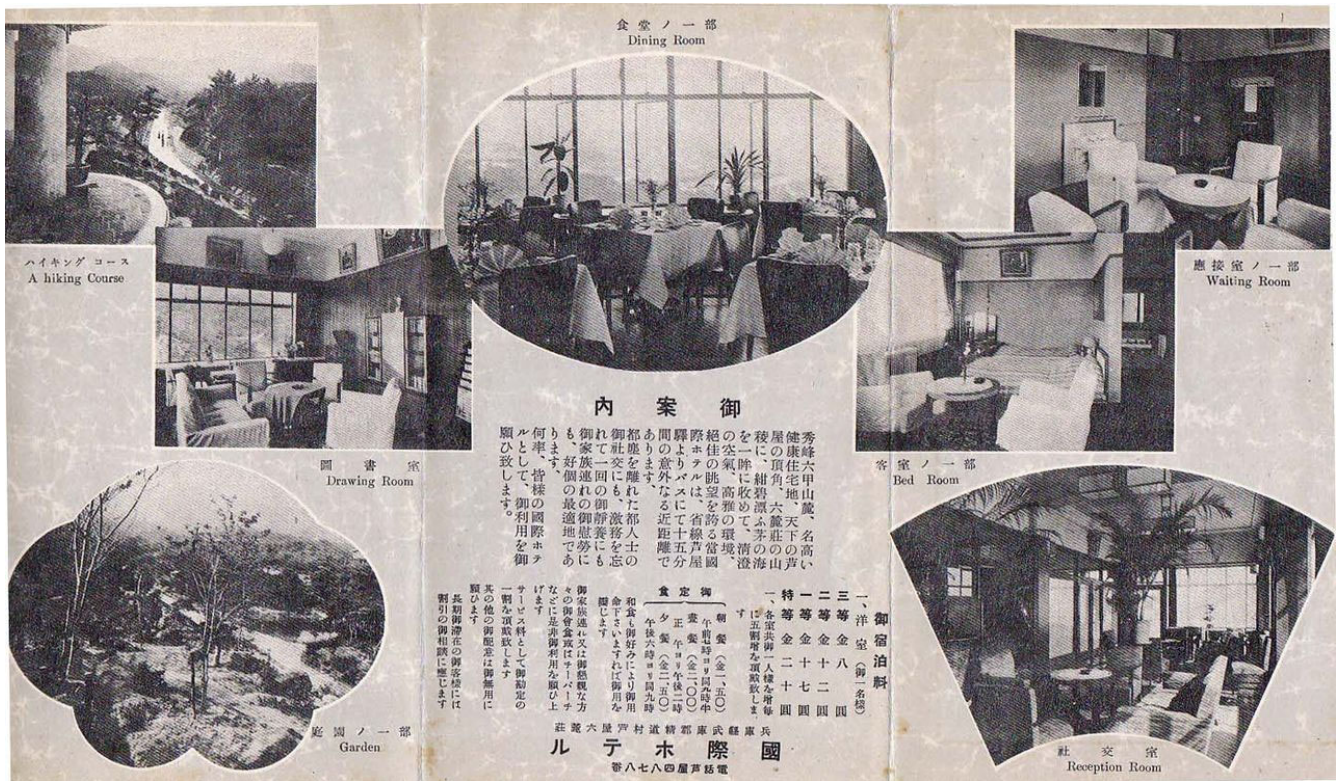
4-1. パンフレット

（近代宝塚歴史紀行 web より）

伊丹にあった堀抜帽子製造所の社長で、六麓荘在住の堀抜義太郎が高級住宅地芦屋市六麓荘に建てたホテルで、昭和14年10月6日開業しました。（室数13、収容人員18）敗戦後は連合軍進駐軍に接収され、その後、芦屋女子短期大学の校舎として、利用されました。

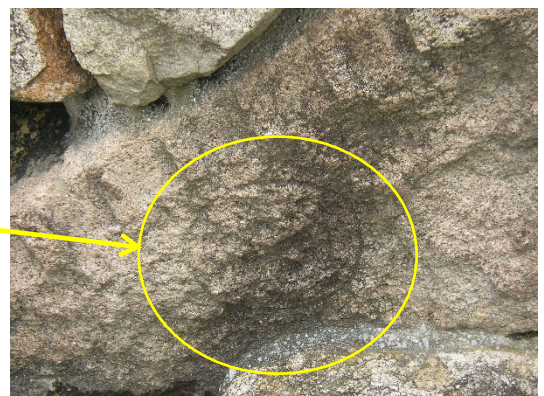


パンフレットには、「秀峰六甲山麓、名高い健康住宅地、天下の芦屋の頂角、六麓荘の山稜に、紺碧漂う茅の海を一眸に収めて、清澄の空気、高雅の環境、絶佳の眺望を誇る当国際ホテルは、省線芦屋駅よりバスにて15分間の意外なる近距離であります。」と記載されています。



4-2. 写真

- ・芦屋学園のパンフレット(震災前のもの)より→
- ・道路際の大坂城刻印石



4-2. 描かれた国際ホテル
 福田眉仙画伯が描く国際ホテル

(1) 「山河放光」

(岩園小学校所蔵)

紙本淡彩の画で、中央に岩園小学校が、右上にホテルが描かれている



(2) 芦屋市名勝繪葉書

「六麓荘からの風景」

福田眉仙画伯は、兵庫県赤穂郡出身で、大正九年に苦楽園と六麓荘にまたがる区画に滝の流れる庭を設け和風住居とアトリエを構えた方。掛け軸などが芦屋美術博物館、姫路市美術館、西宮市立大谷美術館などに多数所蔵されている。




神社

歴史散歩 ④8

芦屋ゆかりの人々4
 日本画家・福田眉仙

地元では「眉仙さん」と愛着をこめて呼ばれる福田眉仙（一八七五〜一九六三）も、画壇では忘れられた日本画家ということになっています。大正九年に六麓荘に移住以来（赤穂郡瓜生村出身）、亡くなる昭和三十八年まで、芦屋の山河をこよなく愛していました。久保

田米徳に師事した福田周太郎（本名は当初麦徳）という画号を与えられています。その後、橋本雅邦を経て岡倉天心のもとにあつて横山大観等と日本美術院創立に参画しました。こうしてみると画壇の本流に身を置いていたと言えます。そして、天心の勧めもあり南画の発展のため本場中国へ写生旅行明治四十一年（一九一〇年）に出かけています。途中、峨眉山に滞在した麦徳はその地が忘れられず、改号して眉仙と名乗るようになります。天心没後は、太陽のように外へ向かつてエネルギーを発散させる大観とは相容れぬものがあつたのでしよう。その性格たるやまるで陽と陰、写生に重点を置いた眉仙のストイックな画業が六甲の山懐に隠れるようにして展開されていきました。もはや時代は眉仙が追い求めていた写生を主とした南画の全盛ではなく、大観のような突き抜けた抽象性も必要だったので。しかし、膨大な写生をもとに描かれた一連の中国の山河（『中国三十絵巻』）に結晶は私心を捨てた眉仙の分身といつてもよいものです。真新しいものだけを追い求める昨今、落款に「知足」と刻んだ眉仙の画業は、肅々として私たちに問いかけるものがあるように思われます。



『支那三十畫巻』上巻
 大正九年(金尾文淵堂出版)館蔵品

問い合わせ 美術博物館 ☎ 5432

5. 建築主について

(1) 堀抜義太郎 「財界巨頭八面観」(実業之世界社、昭和32年3月25日、p.135)

その昔「爆弾三勇士」という軍国美談が伝わるや、全国民の血を沸きたたせたものですが、当時私はこれをもじって、大阪には爆弾でなく「肉弾三勇士」がいると発表してこれが有名になり、新聞のゴシップなどで相当に書き立てたものでした。

この中の一人が松下さんで、他の二人は今では故人となられた中山悦治(中山製鋼社長)堀抜義太郎(堀抜帽子社長)の両氏です。この三人はいずれも一職工より身を起こし、ハダカー貫の体当たりで小工場から独力独行、それぞれ業界の雄となられた人で、そのめざましい躍進振りが世上の注視をあびていたので、大阪の肉弾三勇士としたのです。(以下略) (大阪工業会会長・吉野孝一談)

(2) 堀抜義太郎 坂本慎一「下村宏と松下幸之助の知人に関するそれぞれの回想」

「論叢松下幸之助」第10号 2008年10月より抜粋)

松下幸之助が堀抜義太郎について回想している場合は、江崎利一らと「文無し会」を運営したという話と、終戦直後に借金をしたという二つに限られているようである。前者については、江崎利一との関係を述べる際、次のように回想している。

これからも二人で時折会って話をかわしたいということから、定期的に会合を開くことにして、これに「文なし会」という名前をつけました。二人とも、それこそ一文なしの状態で事業を始めたのだから、ということによる命名でしたが、これには後に四人の方が加わりました。それは、サントリーの創業者である鳥井信治郎さん、中山製鋼所をはじめられた中山悦治さん、京都で重工業に成功された寿工業の常田健次郎さん、そして帽子では日本一になった堀抜帽子の堀抜義太郎さんの四人でした。

みな、いわゆる徒手空拳から身を起こした、同じような経歴の持ち主ですが、業種が異なる気安さもあって大いに意気投合し、当時のお金で一万五千元という相当高額の入会金をとって万一のときの資金とすることにしたり、毎月、大阪の大和屋というところで会合を開き、商売のことについてそれこそ恥も外聞もなく、実情をさらけ出して語りあったりしたものです。こお会合は、次の機会が実に待ち遠しい、ほんとうに楽しいものでしたが、そのうち戦争が始まって、中止せざるを得ないようになりました。

そして戦後、世情もようやく落ち着いて、文なし会が再開できるようになってくると、まずいちばん若かった堀抜さんが亡くなられ、ついで中山さん、鳥井さん、常田さんもこの世を去られて、十五年ほど前からは江崎さんとぼくの二人にもどってしまったのです。

終戦直後の借金については、次のように述べている。

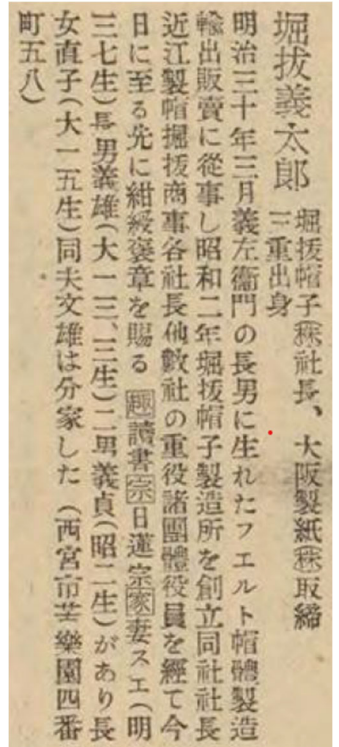
私の個人的な生活状態はどうであったかという、先にも述べたように、私は財閥指定を受けて以来、資産はすべて凍結され、毎月の女中さんの給料まで、進駐軍のゆるしを得なければ払えなくなっていた。私の生活費は、当時の公務員のペースに従って規定され、その範囲内での予算と実績を進駐軍に報告しなければならなかった。

しかし、一社の社長としてこれでまかなえるはずがない。かと言って資産はすべて凍結されているから売り食いもできず、毎日の生活にも次第に事欠くようになっていた。

やむなく親しい友人で会った中山悦治氏、堀抜義太郎氏、鳥井信治郎氏などに月々の生活費を借りてまわらねばならなかった。それぞれに当時の金にして十万円近い借金をしたであろうか。

この堀抜は一般的に事績が紹介されることは少なく、今日となっては知る手がかりが限られている。

下村宏は数少ない堀抜の記事を書いた一人である。昭和十二(1937)年三月、下村は兵庫県六甲山麓の自宅・海南荘を手放し、東京の田園調布に転居した。海南荘を買い取ってくれた堀抜について、次のように書いている。



A 一体その引き取ってくれる人といふのは誰なのかね？

B 堀抜義太郎といふ人だよ。

A 聞かない人だね。

B 僕も実は初めてなのだよ。この間、海南荘惜別の宴に五十名ほど来客が集まったが、この引継の仲介をしてくれた勸銀の田辺加太丸君の外は誰も知らないのだよ。

A どうした人かね？

B 伊丹の制帽工場の主人だよ。

A 制帽？

B 驚くなかれ、今一日に七千五百打(ダ-ス)つくり上げている。七千五百じゃない、打だよ。

A ダアスですかい。ソリヤ大変だなあ！

この記事は昭和十二(1937)年、雑誌『経済知識』の六月号に記載された。同年の『主婦の友』六月号も下村に取材をし、堀抜について聞いている。

下村先生は、田園調布のお宅で、……語られるのであった。

「君、この堀抜といふ男は偉い男だよ。教育は一つもないが、日給七十五銭から叩き上げて、今じゃ世界の堀抜だよ。こんど妙な縁から僕の海南荘を引受けて貰ったんだが、それまでは聞いたこともなかった。前から僕のファンだったらしいが、会ってみると実に偉い男だね。今、日本に制帽会社は二十くらゐあるが、製造高は堀抜一件だけで外の全部を合はせた数より多いんだから驚くよ」

「その人は今幾つなんですか？」

「まだ四十二か三だらうね。とにかく今、旭日昇天の勢で伸びてゐるからどこまで大きくなるか判らんね。君、一度会ってみ給へ、ずゐぶん苦勞もしたらしいが、ああいふ人の話を聴くと、毎日々下積みで、ウダツが上らんとと思つてゐる人には大きな力になるよ」

続いて、この記事は昭和十二(1937)年当時の堀抜制帽のデータを掲載している。

資本金百万円の株式会社、職工千五百人。

昨年度全国輸出量百二十万打、堀抜帽体輸出量百十万打で全体の九割以上に当たる。

昭和三年の堀抜帽体一ヶ月の生産高は千二百打、十年後の現在は一ヶ月十五万打で、まさに百二十五倍の展開である。他十六社を合計しても堀抜一社に及ばざること五万打。

尚ほ堀抜帽体は三年計画で、一日一万一千打、一年五千万円輸出を目論んでゐる。

これが日給七十五銭の職工から出発した、四十二の無教育な男の事業の全貌である。

「帽体」とは帽子の原型であり、帽体にその時々流行の装飾を付けると完成した帽子になるという。

さらに記事は堀抜の半生を紹介している。堀抜は三重県の貧しい農家に生まれ、数え年六歳で母を、十一歳で父を失い、小学校を五年で退学して、十三歳の春に大阪の薬屋へ奉公に出た。やがてメリヤス屋へ転職するが、十九歳でメリヤス屋が倒産し、日本帽体製造所の職工となった。大正七(1918)年、二十三歳で摂津フェルト会社へ転職し、ここで日給七十五銭の生活をおくった。当時は未曾有の物価高のため三度の食事に七十二銭が必要であり、堀抜は食事を二度に減らしつつ、本職の外にメリヤスの夜店を出して窮地を凌いだ。

二十四歳で事務長兼工場長に抜擢され、月給は百円になった。二十七歳で結婚し、昭和二(1927)年、千五百円の資本と七千円の借金により、七十二坪の工場と三十二名の職工で堀抜帽子製作所を

創業した。工場は順調に発展し、昭和九（1934）年三月には高松宮妃の視察を受けたという。

下村によれば、海南荘を手放すとき、堀抜は「器具家財も差支なくばそのままに残して下さい、海南荘として保存しませう、先生いつでも来て泊って下さい」と言った。朝日新聞の飯島幡司は大阪中から石を探し、海南荘に下村の歌碑を建立した。今日、海南荘は解体されて分譲住宅となっており、歌碑は苦楽園四番町公園に残されている。歌碑の表には、「眼ぎむれば松の下草を刈る鎌の音さやに聞ゆ日和なるらし」という下村の歌がきざまれ、裏に「昭和十二年四月堀抜義太郎建之」と記されている。

堀抜と下村は昭和十二（1937）年頃知り合いになり、下村と幸之助の初見は昭和九（1934）年である。幸之助が堀抜とどのようにいつ知り合いになったかは不明である。

(3) 平和産業としての再出発 伊丹市史 第3巻 昭和47年3月31日 p.602

戦前、東洋一といわれた帽子製造工場を伊丹に設立した堀抜帽子は、昭和初期には、その精算額において、伊丹の伝統産業である製造業さえもしのご勢いを示した。ところが、戦時体制に入ってから、原材料が騰勢を受けるようになり、帽子あら転じて軍用のゲートルが主要な製品となっていた。

戦後、平和産業として再出発することになったが、原材料の配給はあっそう乏しくなり、戦後の再出発も容易ではなかった。そこで、戦時中からのストックでようやく食いつなぎ、さらに原料の自給をはかるためにアンゴラ兎の飼育をはじめた。羊毛の輸入が停止していたので、そのような必要性も感じられたわけであるが、展望をもたないアンゴラ兎への投資は有効なものとはなりえず、ついに堀抜帽子は経営不振におちいり、昭和二十六年七月には、富士帽子工業株式会社として、伊丹市行基町の旧堀抜帽子の場所において、再生せざるをえないことになった。

●伊丹市伊丹二百三十六番地
債務者 堀抜帽子株式会社
右の者に対し当裁判所は昭和二十六年八月六日午前十時破産宣告を為したるを以つて左の通り公告する。
一、債務者堀抜帽子株式会社を破産者とする。
一、破産管財人 神戸市生田区相生町二丁目三二、宮本利吉
同 神戸市兵庫区三川口町三丁目七、金治説治
一、債権届出期間 昭和二十六年十月二日迄
一、第一回債権者集会の期日 昭和二十六年九月四日午前十時
一、債権調査の期日 昭和二十六年十月三十日午前十時
一、破産者の債務者及破産財団に属する財産の所持者は破産者に弁済を為し又はその財産を交付すべからず。尚破産者に対し債務を負担する者又はその財産を所持する者は其旨、若し財産を所持する者が別除権を有するときはその債権を有する旨を昭和二十六年十月二日迄に破産管財人に届出すること。
昭和二十六年八月六日
神戸地方裁判所伊丹支部
裁判官 宮原増次

[川口記：「農家の友」昭和24年4月号に、全国の農家にアンゴラ兎の飼育熱が高まっている記事がある]

6. 阪神淡路大震災



情報源：

- (1) 芦屋市ホームページ
- (2) 損耗閉鎖登記簿、建物登記簿 (IT 化以前)
- (3) 「社員読本 1 社是と店史」 昭和 17 年 9 月 1 日発行,昭和株式会社竹中工務店

(4)

- (5) 坂本慎一「下村宏と松下幸之助の知人に関するそれぞれの回想」

論叢松下幸之助 第 10 号 2008 年 10 月 p.91

越山邦夫「三重県名賀郡青山町と伊丹市堀抜帽子製作所社長堀抜義太郎」

地域研究いたみ 第 23 号 平成 5 年 3 月 31 日 p.78

伊丹市史 第 3 卷 昭和 47 年 3 月 31 日 p.602

- (6) 六麓荘四十年史 p.37 「古老座談会」の最終部

— ; それからも一つ堀抜さんがホテルを建てたのはいつごろですか。

田淵 : 戦前に東京オリンピックを目指して建てたのです。

内藤 : 客室が少ないのです。そこへ戦争が来ましたので許可が下りなかったのです。そこであそこが空屋になっていたのが六麓荘の人のために夕食を食べさす場所にしてそして残月庵があって和食の時は残月庵で、あれは六麓荘の会員だけが行きました。

中野 : 料亭で一般にやっていたが大体会員制度で、いま内藤さんが仰言ったように料理屋というものは許されなかったの、会員だけということをやっていた。堀抜さんがあのホテルで洋食をやったのはずっと後です。

— : 残月庵ではスッポンの料理をやっていたのですね。いまの芦大の隣ですね。私の家の上の…

内藤 : あれは広海さんのお持ちものだったのです。

— : 堀抜帽子がホテルをつくったのですね。今日、神井議長が話をしていましたが、普通の人
が五十円くらいの月給のときに一晩泊ったら三百円ついた。三百円というと半歳働かねは
ならぬ。(笑) そうするとあなた方は三百円のホテルにお泊りになった。(笑)

内藤 : 泊りはしませんが食事はよくしました。お客があつたりしますと……。

田淵 : 高い料理でしたね。

— : そのコック長が私のところの大阪の「くいだおれ」の店で働いており七十八才になっており
ます。

多数 : まあ、そうですか。

— : 堀抜のホテルの洋食のコックをしておりました。神戸のオリエンタルホテルに永くおったい
いのを堀抜が引き抜いたのでしょう。

<快男児、堀抜義太郎氏>

中野 : 堀抜という人は愉快的面白い人でした。

— : あの人は大ホラ吹きやでね。(笑)

中野 : 本当に愉快的な人でしたが、あの人は苦楽山荘を残しております。伊丹の帽子屋である苦楽
山荘のところが、下村海南先生の邸で「海南荘」といっておりました。それを堀抜さんが買
い、そしてここにホテルをやりました。

戦争中だったが、いつでも若い芸者五、六人を連れて愉快的な人で「中野さんマージャンをし
ょうか」と仰言っていました。

— : 日本にまだ何も無い時分に、弁当箱型のテープレコーダーを進駐軍から貰って、私たちの喋

ったのをテープに入れて聞かしてくれて吃驚したことがある。あの人はあれだけやっておったのだが、最後はペチャンコになって、ひどいことになった。

内藤：息子さんがいけませんのと違いますか。

－：いや、おやじも晩年ダメでした。派手過ぎました。戦争中に帽子で儲けたが戦争が終ると売れんようになったから、アンゴラ兎を飼うたり、いろいろのことをやりました。

堀技がホテルをやったのは戦争以前で、女学校とどっちが古いですか。

田淵・内藤：女学校の方が古いですね。

－ 学校は何で焼けたのですか。戦争で焼けたのですか。

内藤：漏電で夜の七時ごろに焼けました。

－ 最後に伺いますが図面で見ますと大国主西神社のお宮がありましたが…竹田さんの屋敷の突き当りの山本さんの家のあったところに…

田淵・内藤：坂を上って行きますと鳥居が立っておりますね。

－：そうすると上の道路より上でしたか。ドイツ人が入っていた家の上。

中野：あのお宮さんを私ら目標で上って行きました。現在の水源池のある東隣り竹田さんの裏が
いま売りに出ています。 (おわり)